

選択制講義② テーマ1

「図書館における災害への対応と対策」

- ・常総市立図書館における被災と復旧

講師：常総市立図書館 間中 辰弥

- ・災害から資料を守り、救うために

講師：東京都立中央図書館 眞野 節雄

常総市立図書館における被災と復旧

1 被災した地域・被災当初の状況

常総市は茨城県の南西部に位置している。平成27年9月の洪水では、常総市内で溢水や堤防が決壊したことにより、市域の約3分の1にあたる約40k㎡程が浸水し、多くの家屋が被害を受けるという甚大な被害となった。

被災当初の状況は、洪水発生前日から降りしきる雨により、図書館も自動ドアのセンサーが誤作動を起こしていた。翌日未明には図書館職員も避難されている市民に対応するために各避難所へ現地入りして任務に着いていたので、図書館に戻れたのは2日後の午後だった。館内は流された資料や什器が散乱しており、水を吸って膨らんだ本の圧力に耐えかねて書架の側板が損壊していた。洪水が図書館に及んだのは未明のことであり、今回は図書館での人的被害はなかったが、館内で避難指示が出されるという事態についても想定しなければならない。

2 復旧に向けて

公立図書館・大学図書館職員、NPO団体や図書館関連企業、市民ボランティア等多くの皆様の援助により、復旧に向けて動き出すことができた。汚水に浸ってしまった資料の除籍と廃棄処分や館内の清掃、被災を免れた資料を保護(清掃と除菌)する作業などは12月になるまで続けられた。また、水没した郷土資料などについては、茨城県立図書館による所蔵調査が実施され、特に貴重なものは国立国会図書館の協力で復元されることになった。資料の寄贈や寄付金も多くの皆様からいただいた。

3 仮設図書館の運営、図書館再開へ

休館中にも図書館の利用を望む声は多く寄せられていた。水害から約半年後の平成28年3月、プレハブの仮設図書館の開館にこぎつける。8月31日閉館後は保管していた資料や仮設図書館で貸出していた資料を修繕の終わった図書館

に運び込み、配架作業、蔵書点検を行い、10月初旬に再開となった。

4 結びに

災害復旧には多くの人手が必要だが、自治体単独では図書館に割ける力には限界がある。水害を経験し、図書館は多くの人に支えられて成り立つと実感した。近隣市町村の図書館との交流の機会は意識して設けたいと改めて思った。

災害から資料を守り、救うために

資料保存において、「災害」は一番のリスクである。都立図書館では「資料防災マニュアル」を作成している。公表されている限りでは、本マニュアルが日本で初めてで唯一ではないかと思っている。災害対策は「予防」から「復旧」までの4段階がある。事前対策として、災害の可能性、危険箇所などを洗い出し、対策を講じ改善に努め、被害を受けにくい環境づくりをすすめる。また、救出すべき資料の優先順位を定めるなど、事前対策こそが最大かつ有効な対策である。マニュアルの特徴としては水濡れ被災とその際の塗工紙への対応に着目している。水による被災はさまざまな場面で起こる。カビは48時間で発生すると言われてるので一刻も早く乾かす必要がある。しかし、塗工紙は乾かすときに固着して剥がすことができなくなる。そのため、被害を軽減するためにはむやみに乾かさず時間稼ぎをする。また、水道水で洗浄しておく塗工紙の固着だけでなく、カビの被害も軽減できる。(マニュアル動画で紹介)

都立中央図書館で陸前高田市の郷土資料の修復を行った。修復作業の中で資料を残そうと尽力した人々の思い、図書館員たちの思い、図書館の使命感を感じた。残そうと思わなければ残らない。そういう図書館員が増えることを願う。



▲選択制講義② テーマ1